



農務課長
助川志津雄

用水を活用し農業振興を図っていききたい

戦 後60年が経過し、この間、美濃加茂市の農業や農業を取り巻く環境は、大きく変化してきました。その幾つかを語るとき、この「木曽川右岸用水事業」は、「ほ場整備事業」と肩を並べる施設整備の大きな事業です。

夜中に、懐中電灯を頼りに代かきや田植えの水を求めて細い田んぼ道を行き来したのが、昨日のように懐かしく思い出されます。

その後、昭和40年代に開始された「木曽川右岸用水事業」は、稲作農家を用水の苦勞から肉体的、精神的の両面から解放するとともに、畑作においては、夏場の露地を利用した野菜栽培や年間通水により野菜や花きの施設園芸にも利用され、美濃加茂市の農業生産の拡大に大きく結び付いています。

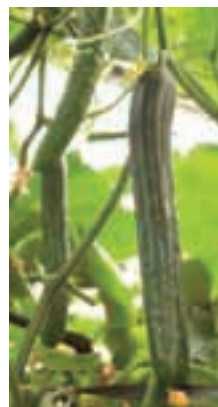
気象変動の激しい昨今、美濃加茂市の農業を潤すこの用水は、ますます重要になってきております。高齢化、担い手不足など多くの課題を抱えた農業ではありますが、用水を敷設した価値（用水の効果）を理解するとともに、ますます用水が活用され農業振興が図れるよう、今後も検討していきたいと考えています。



した。今年のような日照り続きの日であれば、良い野菜は作れなかったと思います。右岸用水のおかげで、野菜を作ることができました。右岸用水を引くには、お金がかかることもあり、「金をかけてまで

何で水を引くんだ」ということで、2割ぐらいの反対はあったと記憶しています。しかし、水がきたら、反対していた人たちもやっぱりやって良かったなあと言っていて喜んでいました。実際に水が出るころを見て、みんな水のありがたみが分かりました。右岸用水が通水前と通水後と比較すると、例えば今年のような天候であれば、作物によって違つとは思いますが、倍以上の収穫の違いがあったのではないのでしょうか。今年のように雨が少ないときには、右岸用水のありがたみを一番感じます。

め、用水が来るまでの間は、井戸を掘って暫定的に水を確保してしました。井戸は、近くの農家の人たちと共同で掘つたので、みんなが一斉に水を使っても大丈夫なように、貯水槽を整備しました。その後、右岸用水が通水しましたが、右岸用水は水圧もあり、ポンプアップの必要もなく、かん水施設に通せば自動的に水をやれるようになり、作業が楽になりました。私たちには井戸がありました。私たちがいない畑にとっては、右岸用水は待望のもので、干ばつの心配もなくなりました。



今後、私たちが消費者に良い作物が供給できるよう、右岸用水の維持管理をしっかりしていただければと思います。極端なことを言えば、右岸用水が健全なら、まちも健全だということにつながると思います。飲み水はもちろんですが、農産物が安定して収穫できることは重要なことですからね。

今年のように雨が少ないときに、右岸用水のありがたみを一番感じます

右 岸用水が通水する前は、稲葉池から水を確保して、田植えを行っていました。昔は、梅雨に入ってから、6月20日から30日ぐらいの間が田植えの時期でした。ただ、今年みたいに雨の降らない年だと、池の水もからからになってしまい、雨が降るまで田植えができませんでした。畑は、右岸用水が来るまでは自然に任せっきりで、水をやるような施設もなかった。雨が降らないと作物は駄目になってしまい大変で

右岸用水が健全なら、まちも健全だということにつながると思います

昭 和30年代後半から、ビニールハウスによる施設園芸を行っています。当時は、キュウリとトマトを作っていました。右岸用水のないころは、近くの小川から水をポンプでくんで確保していました。そのような条件下にあったので、ビニールハウスも小川の近くに造っていました。土地改良事業が完了したころには、補助もあったことで本格的なビニールハウスになりましたが、まだ右岸用水が通水していなかった

露地野菜栽培



森田純平さん
(加茂野町)

主に、メロン、大根、ニンジン、トウモロコシなどの露地栽培のほか、稲作も行っています。昭和56年から平成13年まで美濃加茂市木曽川右岸用水加茂野南工区役員として、ご尽力されました。

ハウス栽培



鈴木康弘さん
(下米田町)

ビニールハウスでキュウリの二期作を行っています。今年は、下米田園芸組合の組合長として、ご尽力されています。

豊かな水は美濃加茂の農業を変えた！

木曽川右岸用水の恩恵

「木曽川右岸用水」が完成するまでは、ため池や中小河川などから水を確保して行ってきた美濃加茂市の農業。「木曽川右岸用水」の通水前と通水後の変化について、市内で農業を営まれている人たちに話を伺いました。